

内田 直文（東洋史学）

清朝の統合と地域社会
—康熙朝奏摺政治の研究—

本論文は、清代康熙年間における文書行政の中心である奏摺政治について考察し、清朝の支配構造を明らかにしようとしたものである。その考察の新しさは、従来十分には考察されていない満洲語で書かれた行政文書の分析を行っていること、及び、奏摺制度の運営に大きな力を発揮したと考えられる皇帝の側近集団としての侍衛組織の形成を明らかにすることを通じて、清朝における皇帝権力や行政構造を追究している点にある。

第1章では、康熙帝が政権の把握を目指し、それまでの満洲族大族を中心とした執政集団を解体し、実務能力に優れた満洲族官僚を用い、奏摺を通じた指揮命令、情報収集体制を確立していったことを明らかにしている。その際、中国文化を身につけた満洲族を足場として、清朝の上部構造としての彼ら満洲族官僚の下に地方の郷紳層を組み込む形で、王朝の支配貫徹が目指されたことを指摘している。

第2章では、モンゴルの帰属によりモンゴルを取り込むことに成功した康熙帝が、それまでの満洲族のみを支持母体とする体制から満洲族旧勢力を抑え、満蒙両者を支持母体とする体制を確立していったことを明らかにしている。

第3章では、康熙帝時代に生じた西北部における軍事的緊張に際し、満洲語奏摺を用いた命令伝達、情報収集が行われ、それが奏摺体制の確立に大きな影響を及ぼしたことを明らかにしている。

第4章では、康熙50年に生じた弾劾事件を契機として、51年以降多くの地方官に対して奏摺の提出が求められるようになり、それまで限られたものにならなくなった奏摺の範囲が格段に広がったことを明らかにしている。

第5章では、康熙帝が、父である順治帝が目指し、満洲族保守勢力の反抗にあって挫折した帝権の確立を、内廷自衛の創設という形で実現していったことを明らかにし、その設立と奏摺政治の確立との関連を追究している。

以上のように、本論文は従来検討されていなかった史料群を考察の対象とし、非漢民族である満洲族出自の帝権が、奏摺という文書伝達を通じて、満洲族保守勢力との軋轢を克服しつつ、さらに文書処理能力を身につけた満洲族官僚を通じて在地勢力を清朝が如何にその支配体制の中に組み込んでいったのかを詳細に明らかにしており、その点でこれまでの学界における研究を進めるものであるといえる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。